

とっこべとら子

宮沢賢治

青空文庫

おとら狐ぎつねのはなしは、どなたもよくご存じでしょう。おとら狐にも、いろいろあったのでしょうか、私の知っているのは、「とつこべ、とら子」というのです。

「とつこべ」というのは名字でしょうか。「とら」というのは名前ですかね。そうすると名字がさまざまで、名前がみんな「とら」という狐が、あちこちに住んでいたのでしょうか。

さて、むかし、とつこべとら子は大きな川の岸に住んでいて、夜、網打ちに行つた人から魚を盗とつたり、買物をして町から遅く帰る人から油揚げを取りかえしたり、実に始末におえないものだったそうです。

慾よくふかのじいさんが、ある晩ひどく酔よっぱらつて、町から帰つて来る途中、その川岸を通りますと、ピカピカした金かみらんの上しも下の立派なさむらいに会いました。じいさんは、ていねいにおじぎをして行き過ぎようと思いましたら、さむらいがピタリとどまつて、ちよつとそれを見上げて、それからあごを引いて、六平を呼び留めました。秋の十五夜でした。

「あいや、しばらく待て。そちは何と申す」

「へいへい。私は六平と申します」

「六平とな。そちは金貸しを業と致しおるな」

「へいへい。御意ぎよいの通りでございます。手元の金子きんすは、すべて、只今ただいまご用立致しております」

「いやいや、拙者せつしやが借りようと申すのではない。どうじや。金貸しは面白からう」

「へい、御冗談、へいへい。御意の通りで」

「拙者に少しく不用の金子がある。それに遠国に参る所じや。預かっておいてもらえまいか。もつとも拙者も数々敵を持つ身じや。万一途中相果てたなれば、金子はそのままそちに遣わす。どうじや」

「へい。それはきつとお預かりいたしまするでございます」

「左様か。あいや。金子はこれにじや。そち自ら蓋ふたを開いて一応改めくれい。エイヤ。はい。ヤツ」さむらいはふところから白いたすきを取り出して、たちまち十字にたすきをかけ、ごわりと袴はかまのはかまも立ちを取り、とんとんと土手の方へ走りましたが、ちよつとかがんで土手のかげから、千両せんりやうばこを一つ持つて参りました。

ははあ、こいつはきつと泥棒だ、そうでなければにせ金使い、しかし何でもかまわな、万一途中相果てたなれば、金はごろりとこつちのものと、六平はひとり考えて、それか

らほくほくするのを無理にかくして申しました。

「へい。へい。よろしゅうござります。御意の通り一応お改めいたしますでござります」
蓋を開くと中に小判が一ぱいつまり、月にぎらぎらかがやきました。

ハイ、ヤツとさむらいは千両函せんりょうこを又一つ持って参りました。六平はもつともらしく又あらためました。これも小判が一ぱいで月にぎらぎらです。ハイ、ヤツ、ハイヤツ、ハイヤツ。千両ばこはみなで十ほどそこに積まれました。

「どうじゃ。これだけをそち一人で持ち参れるのかの。もつともそちの持てるだけ預けることといたそうぞよ」

どうもさむらいのことばが少し変でしたし、そしてたしかに変ですが、まあ六平にはそんなことはどうでもよかつたのです。

「へい。へい。何の千両ばこの十やそこばこ、きつときつと持ち参るでござりましょう」
「うむ。左様か。しからば。いぎ。いぎ、持ち参れい」

「へいへい。ウントコシヨ、ウントコシヨ、ウウントコシヨ。ウウントコシヨ」

「豪儀じゃ、豪儀じゃ、そちは左程さほどになけれども、そちの身に添う慾心が実げに大力じゃ。大力じゃのう。ほめ遣わす。ほめ遣わす。さらばしかと預けたぞよ」

さむらいは銀扇をパツと開いて感服しましたが、六平は余りの重さに返事も何も出来ませんでした。

さむらいは扇をかざして月に向つて、

「それ一芸あるものはすがたみにくし」と何だか謡曲のような変なものを低くうなりながら向うへ歩いて行きました。

六平は十の千両ばこをよろよろしよつて、もうお月さまが照つてるやら、路がみちどう曲つてどう上つてるやら、まるで夢中で自分の家までやってまいりました。そして荷物をどっかり庭におろして、おかしな声で外から怒鳴りました。

「開ける開ける。お帰りだ。大尽さまのお帰りだ」

六平の娘が戸をガタツと開けて、

「あれまあ、父さん。そつたに砂利しよて何しただす」と叫びました。

六平もおどろいておろしたばかりの荷物を見ましたら、おやおや、それはどての普請の十の砂利俵でした。

六平はクウ、クウ、クウと鳴つて、白い泡あわをはいて気絶しました。それからもうひどい熱病になつて、二か月の間というもの、

「とつこべとら子に、だまされだ。ああ欺だまされだ」と叫んでいました。

みなさん。こんな話は一体ほんとうでしょうか。どうせ昔のことですから誰たれもよくわかりませんが多分偽うそではないでしょうか。

どうしてって、私はその偽の方の話をも一つちゃんと知ってるんです。それはあんまりちかごろ起つたことでもうそれがうそなことは疑いもなにもありません。実はゆうべ起つたことなのです。

さあ、ご覧なさい。やはりあの大きな川の岸で、狐きつねの住ねんでいた処ところから半町ばかり離れた所に平右衛門という人の家があります。

平右衛門は今年の春村会議員になりました。それですから今夜はそのお祝いで親類はみな呼ばれました。

もうみんな大よろこび、ワツハハ、アツハハ、よう、おらおととい町さ行つたら魚屋の店たこで章魚たこといかどが立ちあがつて喧嘩けんかした、ワツハハ、アツハハ、それはほんとか、それからどうした、うん、かつおぶしが仲裁に入った、ワツハハ、アツハハ、それからどうした、ウン、するとかつおぶしがウウウイ、ころは元禄げんろく十四年ん、おいおい、それは何だい、うん、なにさ、かつおぶしだもふしぼがり、ワツハハアツハハ、まあおめ、さあ一

杯、なんて大きわぎでした。ところがその中に一人一向笑わない男がありました。それは小吉こきちという青い小さな意地悪の百姓でした。

小吉はさつきから怒ってばかりいたのです。（第一おら、下座しもざだちゆうはずああんまい、ふん、お椀わんのふぢあ欠げでる、油煙はばやばや、さがなの眼玉は白くてぎろぎろ、誰だつても盃さかずきよごさないえい糞面白くそくもない）とうとう小吉がぶつと座を立ちました。

平右衛門が、

「待て、待て、小吉。もう一杯やれ、待てつたら」と言っていました。小吉はぷいと下駄たをはいて表に出てしまいました。

空がよく晴れて十三日の月がその天辺てっぺんにかかりました。小吉が門を出ようとしてふと足もとを見ますと門の横の田の畔くろに疫病除けの「源の大将」が立っていました。

それは竹へ半紙を一枚はりつけて大きな顔を書いたものです。

その「源の大将」が青い月のあかりの中でこと更顔を横にまげ眼を瞋いからせて小吉をにらんだように見えました。小吉も怒ってすぐそれを引っこ抜いて田の中に投げてしまおうとしましたが俄にわかに何を考えたのかにやりと笑ってそれを路のまん中に立て直しました。

そして又ひとりでぶんぶんぶん言いながら二つの低い丘を越えて自分の家に帰り、

おみやげを待つていた子供を叱りつけてだまって床にもぐり込んでしまいました。

ちようどその頃平右衛門の家ではもう酒盛りが済みましたので、お客様はみんなでご馳走の残りを藁のつとに入れて、ぶらりぶらりと提げながら、三人ずつぶつつかつたり、四人ずつぶつつかり合ったりして、門の処まで出て参りました。

縁側に出てそれを見送った平右衛門は、みんなにわかれの挨拶をしました。

「それではお気をつけて。おみやげをとつこべとらこに取られないようにアツハツハツハ」
 お客さまの中の一人がだらりと振り向いて返事しました。

「ハツハツハ。とつこべとらこだらおれの方で取つて食つてやるべ」

その語がまだ終らないうちに、神出鬼没のとつこべとらこが、門の向うの道のまん中にまつ白な毛をさか立てて、こつちをにらんで立ちました。

「わあ、出た出た。逃げろ。逃げろ」

もう大へんなさわぎです。みんな泥足でヘタヘタ座敷へ逃げ込みました。

平右衛門は手早くなげしから薙刀をおろし、さやを払い物凄い抜身をふり廻しましたので一人のお客さまはあぶなく赤いはなを切られようとなりました。

平右衛門はひらりと縁側から飛び下りて、はだしで門前の白狐に向つて進みます。

みんなもこれに力を得てかさかさしたときの声をあげて景気をつけ、そろそろ随ついて行きました。

さて平右衛門もあまりといえはありありとしたその白狐の姿を見ては怖おどさが咽喉のどまでこみあげましたが、みんなの手前もありますので、やっと一声切り込んで行きました。

たしかに手ごたえがあつて、白いものは薙刀の下で、プルプル動いています。

「仕留めたぞ。仕留めたぞ。みんな来い」と平右衛門は叫びました。

「さすがは畜生の悲しさ、もろいもんだ」とみんなは悦よろこび勇ゆうんで狐きつねの死骸しがいを囲みました。

ところがどうです。今度はみんなは却かえつてぎっくりしてしまいました。そうでしょう。

その古い狐は、もう身代りに疫やくび病びょうよけの「源の大将」などを置いて、どこかへ逃げているのです。

みんなは口々に言いました。

「やっぱり古い狐だな。まるで眼玉は火のようだったぞ」

「おまけに毛といったら銀の針だ」

「全く争われないもんだ。口が耳まで裂けていたからな。崇たられまいが」

「心配するな。あしたはみんなで川岸に油揚を持って行って置いて来るとしよう」

みんなは帰る元気もなくなって、平右衛門の所に泊りました。

「源の大將」はお顔を半分切られて月光にキリキリ歯を喰いしばっているように見えませんでした。

夜中になってから「とっこべ、とら子」とその沢山の可愛らしい部下とが又出て来て、庭に抛り出されたあのおみやげの藁の苞を、かさかさ引いた、たしかにその音がしたとみんながさつきも話していました。

青空文庫情報

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店

1988（昭和63）年12月10日初版発行

1990（平成2）年10月20日8版発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とっこべとら子

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>